

持続可能な集落維持に向けた農村観光の取り組み

～交流者から関係者(2 地域居住)へ、そして移住実体験を踏まえて～

富山県氷見市 稲垣 信志



1. はじめに

日本の農業・農村は、「食」を支えているだけではなく、国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全など様々な働きを持って農業・農村の多面的機能と称されている。この農業・農村の多面的機能は、日本国民の大切な財産であり、これを維持発揮させるためにも、中山間地域の農業を継続することが重要である。

そこで、中山間地域で農業所得を上げ、地域に愛着を持たせるために農村観光ビジネスが必要だと考える。しかし、全国的に農村観光でにぎわっているのは少数の地域であり、大多数の地域では人口減少、担い手不足の壁に悩まされ、行政支援も模索状況となっている。

本レポートでは、私自身が交流者から関係者として関わった富山市八尾町大長谷地区と、その後、地域おこし協力隊として移住した氷見市の活動地域での実践活動から、地域で行われてきた都市農村交流の実態を整理し、これからの展開について述べたい。地域おこし協力隊という行政立場とは異なった実働者レベルでの目線から、自らの実体験を盛り込みたい。

2. 富山市八尾町大長谷地区における都市農村交流のプロセス

まず、私自身が地域リーダーになろうと決意したきっかけとなり、北陸で初めて『ディスカバー農山漁村の宝』に選定された、富山県富山市大長谷地区における都市農村交流について述べる。大長谷は、岐阜県境に位置する限界集落だが、人が人を呼ぶ仕組みづくりを 30 年近く続けてきた、富山県内の都市農村交流の先駆的地域と言える。私自身も、大長谷での都市農村交流を通して、①今ある地域資源を財産として活用すること、②高望みをせず身の丈にあった活動の継続が人の輪を広げることを学んだ。そして、人が人を呼ぶことで限界集落でも賑わいを作り出せるということを実体験出来た。

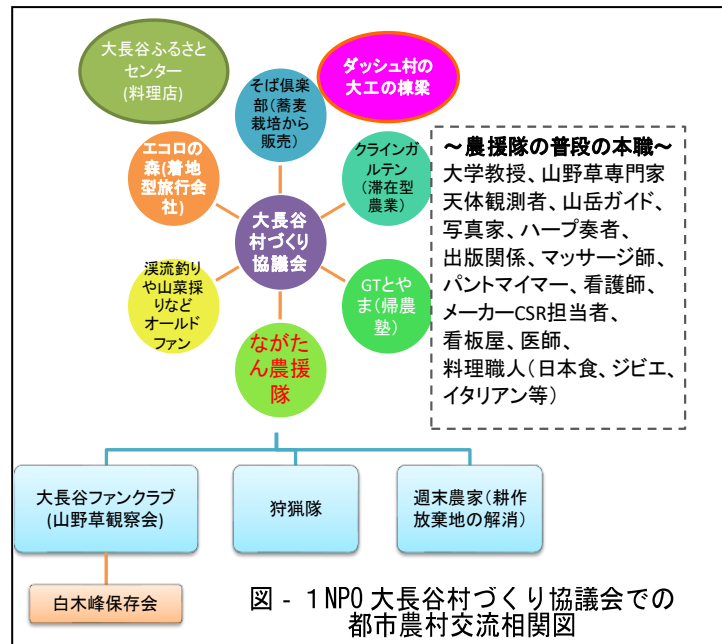
(1) NPO 法人大長谷村づくり協議会の取り組み

大長谷地域は、学校や病院等の施設がある八尾町まで 30 km、自動車でも 50 分程度かかる限界集落である。豊かな自然環境や農業、農村文化などの地域資源の活用と都市農村交流を行うことを目的として、2008 年に地域住民が中心となり「NPO 法人大長谷村づくり協議会」を設立した。そして、大長谷村づくり協議会は、これまでリピーターとなっていた都市住民を関係人口として位置づける組織「ながたん農援隊」を 2010 年に創り、都市住民同士の横のつながりと地域住民との連携を深めていった。

NPO 法人大長谷村づくり協議会は、行政に頼らない身の丈にあった活動を地道に継続していく活動を行っている。その結果、交流人口が徐々に増加し、2013 年には、ながたん農援隊員数は、地域住民の 3 倍を超す 150 名を越える組織になっていった。

大長谷地区で 30 年かけて行われてきた都市農村交流事業は、民間旅行会社（株式会社エコロの森）や都市住民サークル（そば倶楽部、ながたん農援隊）など新たな団体との連携が生まれ、今も尚、新しいつながりで広がり発展し続けている。

交流人口から関係人口の受け皿となっている「ながたん農援隊」では、自らの知識や技能を大長谷で貢献するプロボノも展開しており、地域活性化に一役かっている。



(2) 交流人口から関係人口、移住促進への流れを作る

1990 年代、大長谷地区には 10 組余りの家族が移住したが、その後定住者はなく、交流者もわずかであった。当時、都市住民が田舎に移り住むことは珍しく、移住者受入について地域住民と移住者双方に思考の差があり、問題が絶えなかったと聞いている。

それでも、1990 年代の移住者たちは、最終的には、1 / 3 の 3 組の家族が定住につながり、現在では、地域の役員やリーダー的存在になって集落維持に貢献している。過去の問題を乗り越えた移住者は、現在では大長谷での移住対応の窓口となり、里山で暮らす厳しさや農林業を新たな移住者に体験させながら、空き家を斡旋している。

大長谷のような豪雪地帯では、冬の屋根雪おろしの処理が一人前に出来る人間が地域で認められる。そのため、近年は屋根雪降ろしの体験道場を開催し、地域で暮らす厳しさも事前に知ってもらう取り組みが行われている。また、1985 年から開催されている地域行事の「ながたん蕎麦祭り」は地域住民だけで行われていたが、2010 年頃からリピーターとなった都市住民もイベントスタッフとして参画したりするなど、地域の実情に関わってもらう都市農村交流事業が行われている。大長谷では、様々な取り組みによって関係人口が増加し、その結果、2017 年現在 50 人 35 世帯の地域に、5 年間で 6 組の夫婦（16 名）が移住している。さらに現在でも 26 組以上が、移住を模索する週末農家として活動し関係人口となっている。

(3) 大長谷で実体験できた交流による地域の変化

文化風習の異なる都市住民を受け入れる寛容な体制は、一朝一夕には出来ない。大長谷での取り組みから、行政の手厚い支援がなくとも、地域住民が工夫をしながら知恵を絞り、地域で連携して動き出すことが非常に大事であることが解った。例えば、交流の際に先祖代々引き継がれてきた「食」を都市住民にもてなすことで、地域の魅力がより一層引き立った。食でもてなすことは、地域住民が多く関わることにともつながり、近年少なくなった地域住民同士の縦のつながりを改めて構築するきっかけにつながっていると気付かされた。

地域住民が協力しあう中で、人手が不足している部分に都市住民が参画することにより、都市住民には大長谷を故郷のように思う意識が芽生えていった。大長谷の人々の暮らしや働き方は、都市住民にとって非日常的な事が多く、その活動を実際に間近で見ることで感動となり、大長谷の人々の誇りと自信につながっていく。

このように、移住をしなくても関係人口として地域の活性化に一役買うことは、他の地域でも実現できることであり、私自身、2015 年より氷見市地域おこし協力隊となって、新たなフィールド氷見市の里山で交流人口から関係人口への事業展開を繰り返している段階である。次に氷見市での実践をまとめていきたい。

3. 氷見市における地域おこし協力隊活動

(1) 氷見市の概要

氷見市は富山県の西北、能登半島の東側付け根部分に位置する。人口 48,491 人、17,663 世帯、高齢化率 36.1%である（2017 年現在）。日本海有数の氷見漁港には、四季を通じて 156 種類もの魚が水揚げされ、初夏の「マグロ」、冬の「寒ブリ」、そして「氷見イワシ」は広辞苑にも掲載されるほど有名である。市や観光協会は、民宿とブリを中心とした魚料理を地域資源と考えており、一方で中山間地域での都市農村交流は活発ではなかった。

氷見市の地形的な特徴は、海に面した平野部を中心に、5つの谷筋の集落地区から形成されている。私は、そのうち、速川地区、脇之谷内集落、碁石地区、八代地区の4つの中山間地域と、平野部地域である稲積地区で活動を行ってきた。今回は、そのうち速川、脇ノ谷内、上穂積の3つの地域に絞り、協力隊前のこれまでの取り組みと、協力隊後の実践活動を検証していく。

氷見市概要	
人口	48,491人(2017年)
世帯数	17,663世帯(2017年)
高齢化率	36.1%(2015年)
面積	230.6km ² (山手線4個分)
一般会計歳入	22,871百万円(2017年)
市一般職員	367人(2015年)

表-1 氷見市概要

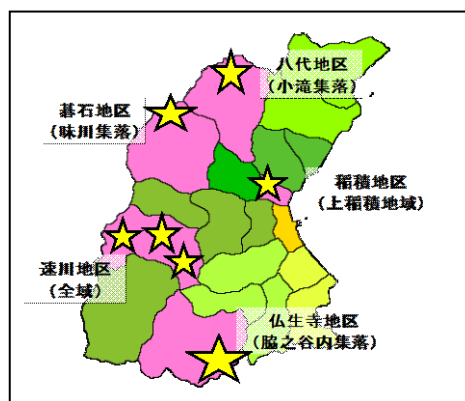


図-2 私が氷見市で関わった地域
(1896 年の行政区画図)

(2) 速川地区の概況

速川地区は、9集落からなる小学校地区単位の地域である。2015 年の国勢調査によると、人口 1,324 人、437 世帯、高齢化率 41.5%である。速川地区の特徴は、1970 年代から始ま

った卓球大会をきっかけとした地域参加型行事が多数行われているところにある。この卓球大会には、地区の児童、青年、一般、婦人等地域の人々が参加していたという。

その後に開催されている地域参加型行事としては、1980 年から元旦マラソン大会、1990 年にウォーキング大会と音楽祭、2000 年に虫送り等がある。これらの活動は全て独自予算で行われており、卓球大会以外は、全て現在も活動は継続中である。

2015 年には、地域全体で特産品（サツマイモ）を作って活性化させようとする事業が始まり、NPO 法人速川活性化協議会が設立された。

(3) 脇之谷内集落の概況

脇之谷内地区は、2015 年の国勢調査によると人口 120 人、41 世帯、高齢化率 40.0%である。脇之谷内集落の特徴は、大地主がおらず、7 つ程の地主が存在する地域である。2001 年から 5 年間、地域行事として虫送りや七夕などが行われ地域が盛り上がっていたが、現在は衰退している。

区長が変わる度に方針が変わることもあり、中長期的な展開が見いだせていない。また、脇之谷内集落において、これまで都市農村交流は行われていなかった。

(4) 上稲積集落の概況

上稲積集落は、2015 年の国勢調査によると人口 586 人、170 世帯、高齢化率 24.2%である。また、富山固有の稲積梅の発祥地であり、2000 年に氷見特産稲積梅生産組合を創設し、その後 2010 年には稲積梅株式会社を設立し、6 次産業化を行っている。稲積梅を原材料とした加工品は全国展開し販売を行っているが、安定した販路の確保や後継者不足が課題である。2014 年にオーナークラブが作られ都市住民を受け入れようと取り組んだが、集客が思うようにいかず、現在は活動休止中である。

(5) 都市農村交流事業の停滞要因と協力隊としてのプログラム再編

氷見市でのこれまでの都市農村交流イベントの参加費用は、無料や 1,000 円以内の安価なものが主流であった。その要因として、行政主体の補助金に頼った取り組みが多かったからであると考えられる。行政からの支援で事業予算がある時は、イベント運営は可能であるが、行政支援がなくなると継続されず、地域が「持続力」をつけられるような P D C A サイクル（Plan：計画→Do：実行→Check：評価→Act：改善）が事業に組み込まれていなかったのも事業失敗の要因であったのではないだろうか。

そこで、私が氷見市地域おこし協力隊として一番初めに企画した 2015 年の「サツマイモ収穫体験」では、富山県中山間地域チャレンジ支援事業の助成金を活用し、参加費 2,000 円の価格設定でイベントを試みた。実施前の意見には、これまで自分たちの行ってきたイベントは 1,000 円以下の安価なものが多く、特に行政の補助や支援があった時は人件費や材料費を格安で設定してしまい、地域の負担が大きくなってしまったものが少なかったという声があった。

そこで私は、過去に速川で行われてきたイベントや活動（Do）の中で、都市住民の心に響くものには価格・事業内容を改善し（Check）、地域住民同士の阿吽の呼吸で行われてきた計画（Plan）も計画書という書面で理解できるように統一し、改めて都市農村交流イベント「サツマイモ収穫体験」の形に改善（Act）した。

事業に関わった地域の人々にそれ相応の対価を支払うという新たな行為は、私が大長谷時代に培ったものであり、これまで無償で活動を行ってきた氷見の地域の人々には斬新であったようだ。行政依存での事業運営をしてきた地域住民の意識に新たな風を吹かせることに結びついたようだ。結果として、参加者から「参加して満足である・また参加したい」という声を多数聞くことに繋がり、交流人口から関係人口へと徐々に繋がってきている。

本イベントを行うにあたって、私自身は、地域の運営スタッフに「数年後には、自立可能な事業展開になるよう品質向上に努めよう」と説明してきた。翌年の同イベントツアーは、500 円アップの 2,500 円で行い、地域の中にも品質向上の意識が養われようとしている。また参加者も、リピーター 5 名を含む 20 名（前年より 5 名増）となった。

この先、受入地域が疲弊せず持続可能な運営を行うには、4,000 円から 6,000 円程度に価格設定した体験イベントを目指さなければ、地域事業の自立は難しいと考える。イベントを主催する一部の人だけでも、中長期的な都市農村交流ビジョンを作り、それを賛同してくれる周囲に共有出来なければならないと考える。

「サツマイモ収穫体験」では、地域の価値を高めて滞在時間・滞在費用を向上させるために、サツマイモの収穫の仕方を地域住民に教わってもらうことで、交流をしながら体験を行う場を提供した。収穫体験後は、地元のお母さんたちに食事を作ってもらい参加者をもてなした。また参加費の中に、普段市場には出回らない新鮮で美味しい地元の野菜や、温泉入浴券を土産として付け、観光消費の拡大にも努めた。

このような、都市住民が田舎体験を通して地域住民と交流し、地域の産物を友人知人に土産としてお裾分け出来る仕組みは地域住民からも評価され、氷見市の他地域や他団体に口コミ等で広まり、2017 年 12 月現在までに 5 地域、延べ 31 本の都市農村交流イベントが運営され、約 1,000 人以上の人々と関わりを持つことが出来ている。表-2 では、3 地区で行った代表なものを記載する。

	速川地区	脇之谷内地区	稲積生産組合
イベント名 (参加費)	①サツマイモ収穫体験 (2500円) ②民芸品体験 (8000円) ③せっかくウオーク (3500円)	①キムチ教室 (2500円) ②氷見里山体験ツアー (3000円)	①梅ざんまい体験ツアー (2300円) ②梅の花見ツアー (1800円)
イベント内容	①サツマイモ収穫体験+食事+お土産+入浴券 ②薬細工と竹細工体験+食事+お土産 ③ガイド付きウォーキング+おやつ+お土産	①キムチづくり+食事+お土産 ②ガイド付き里山散策+食事+お土産	①梅摘み取り+梅ジュースづくり+食事+お土産 ②里山散策と花見+食事+お土産

表 - 2 3 地域における都市農村交流体験事業の内容

4. 交流者→関係者→移住者となった私が捉えた中山間地域の現状

外部の人間が田舎で事業や活動をする場合、良い事業なのだから、皆共感して動いてく

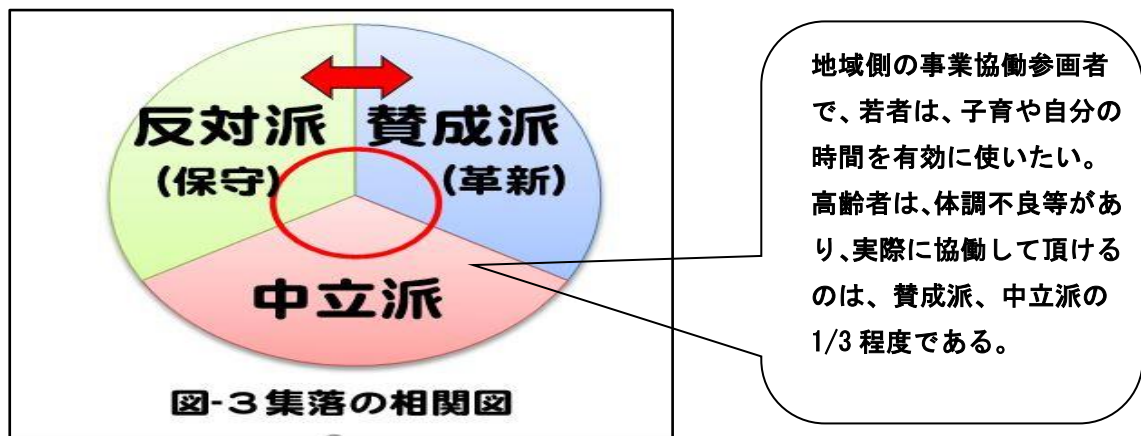
れるだろうと錯覚してしまうこともある。しかし、いくら良い事業であっても、地域の人たちが快く事業に協力してくれるとは限らず、地域住民を動かすことは容易ではない。私自身が、交流者から関係者、移住者という段階を踏んで地域に関わってきた実体験により見えてきた新しい取り組みが思うように進まない中山間地域の現状を下記に示す。

(1) 立場が分かれてまとまらない地域—地域住民 1 / 3 の法則

大きな地区では、集落単位の権利主張があり、まとまるのは難しい。小さな集落ではコンパクトにまとまっていると思いがちだが、意見が 1 つにまとまらない地域は少なくなく、地域内で派閥や対立関係が生じて、結果として地域が衰退することに繋がっている。

地域がまとまらない理由としては、①高齢化により自分たちが責任をとれなくなっている、②地域内にどんなことでも反対する人々がいる、③冠婚葬祭を自宅や公民館で行わなくなり集落の関係が薄くなった、などが考えられる。

私のようなよそ者が 1 軒 1 軒回って地域の人たちとじっくり話す中で、地域にとって良い事業であっても、賛成派のグループ、対立する反対派のグループ、そしてその都度事有益になりそうなグループに賛同する中立的なグループが、各々 1 / 3 程度存在することが解った。



また、各グループのリーダーやボス的な存在は年配の男性である。婦人、若者グループにもリーダーは存在し、各グループの比率は、同じく 1 / 3 程度であることが分かってきた。

中山間地域で暮らすためには、協同作業が必須条件であるが、そこには都会では考えられない複雑な人間関係が存在する。地域に残っている人々も、複雑な人間関係が嫌で自分たちの暮らしている地域を率先的に改善しようとする人が少なくなっている。

(2) 街中への移住を希望する人々

このようなまとまらない地域が嫌で中山間地域を去っていく人が多いのだが、人間関係を理由に出ていくことは集落ではタブーのようにも感じる。中山間地域を離れて街中に移

住を希望、あるいは実際に移住した人々への聞き取りから、離村理由は、①通勤・通学が不便、②病院や買い物が不便、③仕事がない等である。

疲弊・衰退する地域で、その真の理由を理解しないボスの人々の多くが原因を自分たちにせず「行政が悪い」と言って他に責任転換していることも、離村をさらに加速させている理由である。都市住民が移住してきても数年でまた都会に戻ってしまう要因の 1 つは、地域内での人間関係である場合も多いと感じる。

(3) 農業を行わない子供世代

全国の中山間地域でにぎわいがあるのは、まだまだごく一部の地域である。私が耳にした農業従事者の意見は、マイナス思考が圧倒的に多く、今後ますます農地が荒れることが予測される。中山間地域で農業を担っている人の多くは後期高齢者であり、先祖代々受け継いできた農地を自分の代で荒らしたくないという思いが強く、利益無しで農作業をしている。そのため、農業で稼ぐというよりも、別の職業で稼ぐ兼業農家が多い。

そんな農業の姿を見てきた子供たちは、自分たちが育った土地で農業を行う意義を感じていない場合も多い。野菜や米を自らが作れる環境にしながら、スーパーで購入したほうが安いという意見も聞こえてきた。また、息子たちに自分と同じような苦勞をさせたくないという、高齢者の意見も少なくはなかった。

(4) 地域おこし協力隊として得られた集落の 2 / 3 の賛同

先の図 - 3 で表した通り、まず賛成住民 1 / 3 の信頼関係を移住者が構築出来れば、地域での暮らし（田舎暮らし）は長い定住に繋がる可能性がある。しかし、移住後に地域住民の 1 / 3 を味方につけられなければ、よそ者が地域を巻き込んで都市農村交流事業を行うことにも相当苦勞する。

私自身 2015 年から脇之谷内集落の住民となり、表-2 のような都市農村交流体験事業を行ってきた。また 2016 年より集落の体育委員にも任命され、仏生寺地区で開催されたスポーツイベントでは全戸個別訪問を行って参加協力をお願いするなどして、地域住民とコミュニケーションを行う努力をし続けてきた。

これらの活動を行ったことで、脇之谷内集落で地域活動に関する全戸アンケートを実施することができ、集落の 15 歳以上 100 名に配布、うち回収は 92 名と、回収率 92% となっ

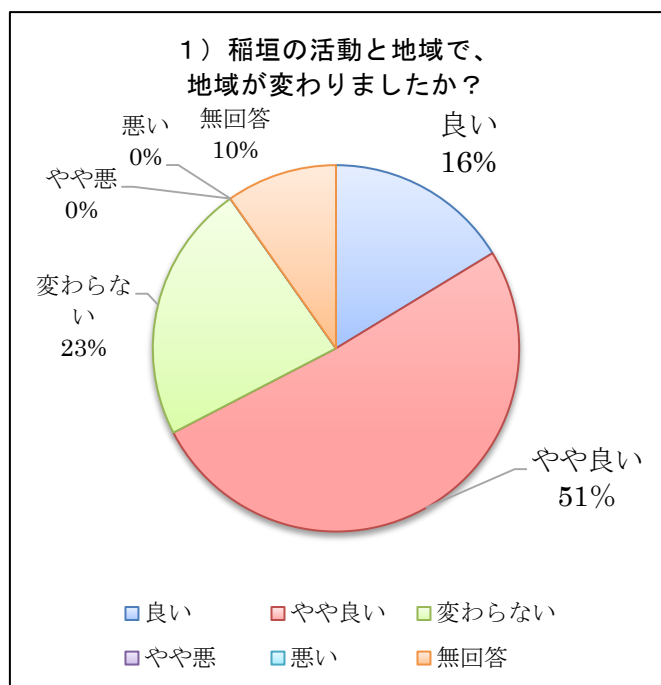


図 - 4 脇之谷内アンケート結果

た（2015 年の国勢調査の結果によると 41 世帯 120 名だが、実際には介護で施設に行かれている人や諸事情により配布できず）。

図 - 4 のように、「地域おこし協力隊稲垣信志の活動と地域で、地域が変わったと思いますか？」という設問に関して、「良くなった；16%」、「やや良くなった；51%」、「変わらない；23%」、「やや悪い・悪い；0%」、「無回答；8%」という回答があった。この結果から、賛成派＋中立派＝16%＋51%＝67%≒ 2／3 であり、反対派＝23%＋10%＝33%≒ 1／3 と読み取れる。

脇之谷内での都市農村交流は、反対がいる中でも 2／3 の地域住民の応援や支援を受けながら、発展し続けられている。それには、イベントを行うまでに、地域の人と信頼関係を築き上げていくことが大事である。私の場合は、お酒が飲めないので、飲みにケーションは苦手であったが、地域の人と共に農作業（特に年配者が苦手な重労働や急な法面の草刈り）や側溝掃除など一緒になって汗をかき信頼関係を築いていった。また、イベントを継続していくためにも、事業計画書の作成、関係各署への申請、法令順守等、地域住民の苦手な裏方部分を協力隊が実行するのも重要であった。

このように、地域住民を動かすには 2／3 以上の地域住民の同意を得なければ、物事を進めるのは難しい。地域活動を行う際は、常に 2／3 以上の同意を得られ、地域がまとまるような事業を心がけたい。

地域おこし協力隊や都市からの移住促進に携わっている全ての人に対し、一生懸命地域との信頼関係（コミュニケーション）を図ることが重要であると、切実に伝えたい。また、私自身の実体験が、交流者から移住者へと長い年月をかけて進化した立場だからこそ、その地域の観光資源を発掘し、農村観光に繋げられる立場にもなり得えたと思っているため、このような中長期的な交流事業を発展させることで、骨太の地域活性化に繋がると思っている。

5. 都市農村交流から農村観光に向けて

(1) 都市住民の関わり 1／3 の法則

また、これまで数多くの都市農村交流を行ってきた実績から、都市農村交流から農村観光に向けても、1／3 の法則が提唱できる。

図 - 5 で示す通り、仮に移住者を募りたい地域が 1 組の移住者の受け入れを成功させようとするならば、田舎暮らしに興味がある 3,000 人に都市農村交流体験を告知しなければならない。チラシを配っても、実際に参加する人数は 1／3 の 1,000 人程度だからである。

延べ 1,000 名のイベント参加者（交流人口）の中で、再度同じ地域のイベントに参加したいと思う人は、その 1／3 の 300 人程度。さらに、都市住民の人たちの中で、実際にリピーターとして再度参加しようとする人数は、100 名程度である。イベントに参加出来ない理由として、①期日が合わない②先の予定がある③地域から遠い④家庭の事情等の理由が挙げられる。

100 名のリピーターの中から、さらによりもっと地域と関わりたいと思う人は、1／3 の 30 人程度。その中から農作業等に従事するような関係人口になる人々は、1／3 の 10

名程度である。イベント・農作業等に従事出来ない理由として、①タイミングがあわない、②経済的に難しい等が挙げられる。

その 10 名の中から、今の仕事を辞めて、移住定住を考える人達は、1 / 3 の 3 名程度であり、実際に移住定住に繋がる人々は、その 1 / 3 の 1 名になるという私の実感である。

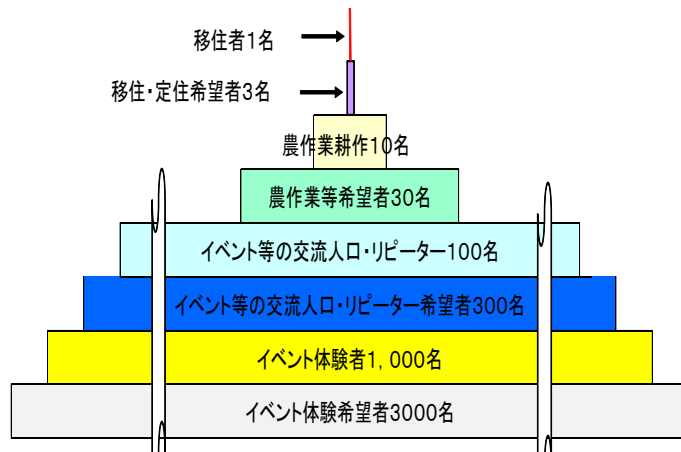


図 - 5 移住者 1 名とイベント体験事業希望者の相関関係ピラミッド図

この理論は、私の経験値によるものであるが、地域側の受入体制によっては集客人数も少なくもなるし、逆に参加希望者のニーズをつかまない都市農村交流は、回や人数を増やしても移住定住に結び付かない。地域資源の本質を理解しないで行われている都市農村交流体験事業は、この危険性が高いだろう。

(2) 身の丈にあったイベントと小さな経済・地域の魅力再生

都市農村交流事業で、持続可能な農村観光を築きあげていくためには、①地域にあったことを行い全く初めての取り組みは行わない、②都市住民に郷土食を提供する、③事業予算の 7 割は地域内で支出を行い、外部支払いや委託は極力避ける、ということを中心に、PDCA サイクルを意識し続けていくことが大事である。

行政主体の補助事業でイベントを行うと、備品や資材購入など外部への予算付けが多く、地域で実際に活動する人は、無償ボランティアである場合が少なくない。このようなケースでは、補助事業予算がなくなると手出しが多くなり、結果として、イベントは消滅してしまうケースが多い。補助事業で地域住民に外貨を稼ぐということを体感してもらい、向上心を芽生えさせ、補助終了後も自立して採算が取れるようにしようと意識を変化させることが、地域の魅力再生にもつながると考える。

6. 各種団体と連携強化による今後の展開

このような環境を整えていくためにも、今後は現在私が携わっている 3 団体を 1 つにまとめ、農村観光の受け皿組織団体（仮称：氷見市里山活性化協議会）を創設したい。関東・中部・関西等の都市部の顧客に対し、「いつでも、あなただけ」の氷見農村観光プランをプロデュースできるような農村観光ビジネスを展開して地域活性化に繋げていきたいと考えている。

また、今まで個々の地域で産品を参加者に提供していたが、各地域が連携することで集落ブランドから市の里山ブランドへと展開し、産品の種類や消費規模を拡大につなげ、中山間地域の農産物の所得向上へと発展させて行きたい。

また、現在の氷見市の観光のメインである漁業関係者や、魚介類をふんだんに振る舞う民宿と連携し、山も海も楽しめる農山漁村の観光業を築きあげて行くことで、氷見市内での滞在期間を 2 泊から中長期にすることも可能になるだろう。

7. おわりに

大長谷での取組事例を経験して氷見市で行っている活動は、ようやく交流人口が広がろうとしている段階であり、関係人口の構築は始まったばかりである。

中越防災安全推進機構・稲垣文彦氏の『共感を活かした農山村再生に向けて』のレポートの中で、「足し算のサポート」では集落の守りを固め、ある程度の時間経過の中でしっかりと守り築き上げ、そこから「掛け算のサポート」で攻めの仕組みづくりに切り替えていくことが大事だと唱っている。

農村観光における交流人口、そこから始まる協働作業での関係人口、そして移住定住へと繋げるために、私が現在行っている事業・活動は、まだ助走であり足し算の部分でしかない。今後は、行政などから掛け算のサポート支援が受けられる組織体制や自立した集落づくりを目指し、様々な外部の人々との連携・協力・協同作業を行いながら、豊かな農山漁村食材の宝・富山県のモデル地区になるよう鋭意努力していきたい。

更に 20 年後には、地域リーダー養成塾で講師として呼ばれるような事業展開に発展できるように志して、本塾に恩返しをしたい。

最後になりますが、本塾を 1 年間学ぶことで送り出してくれた氷見市並びに地域の人々、本塾の講師の方々、塾運営で苦勞された事務局の方々にこの場を借りて、厚くお礼申し上げます。

【参考文献・ホームページなど】

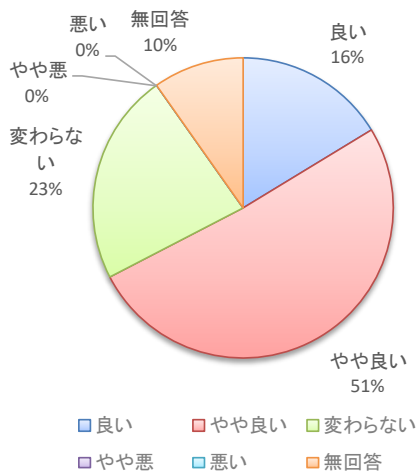
【全国地域リーダー養成塾】大森彌塾長の冒頭挨拶・『学ぶではなく、気付き』、『農山村地域の振興と担い手づくり』（関司直也）、他 全ての講義、より

別添資料

地域おこし協力隊についてのアンケート結果抜粋

(脇之谷内集落／配布41世帯100名、回収92名)

1) 稲垣の活動と地域で地域が変わりましたか？



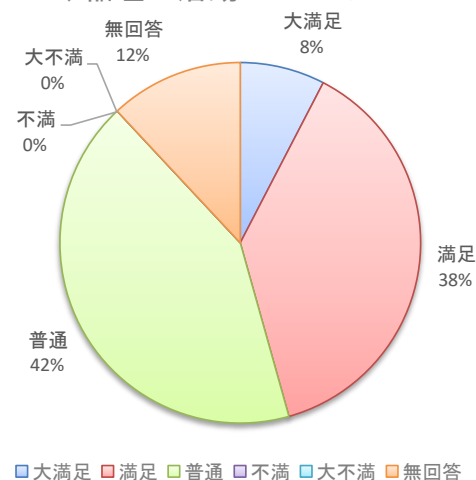
1)で「良くなった」「やや良くなった」と思う理由

- ・いろいろと活動を企画して実行されることで、時間がある方が参加されて交流が広がったと思う
- ・一人が勇気をもって活動する心に感動です。なにごとにも負けず前進して下さい。部落の活性のためにも応援していきたい一人です
- ・この地域は良いけれども本人はあまりにも大変だと涙ぐましい行動だと思うけれど自分はどうもしてあげられない
- ・明るくなったと思うから。周りが楽しそうにしていることが多くなったと思うから。
- ・ご近所さんとやった恋ダンスを通して交流がもてたので
- ・YouTubeで恋ダンスなどをしていたのが全国放送していたから
- ・キムチ作りをして脇之谷内の人と一緒に頑張ったこと

1)で「変わらない」と思う理由

- ・脇之谷内は他の(速川・稲積)に比べたら小さい集落ですから、一人一人の住民の個性が目立ちますよね。よくも悪くも今までやってきたことを変えるのは大変なことだと思います。が、良くなったと感じておられる人もたくさんおられると思います。

3) 稲垣の活動について



3)で「大変満足」「満足」と思う理由

- ・企画力と行動力があると感じる
- ・地域の良い所をアピールできている
- ・一生懸命取り組んでおられる様子を見えています
- ・稲垣さんの村や地域での活動は、東京の娘夫婦もよく知っていて、説明なくても話が通じます
- ・稲垣さんの活動が夢を与えてくれるから
- ・知らぬ土地で頑張っている姿に応援する一人として、これからも楽しみにしています。

3)で「普通」と思う理由

- ・あまり地域が活動に関わってないのでよく分からない
- ・一生懸命やってくださることはとてもありがたい事ではあるが、昔からの独特な村の気質があり、人を動かすことの困難さを感じる
- ・他所からの移村がまだ。地域での共通化がない※他所の〇〇の地域感情が捨てられない(地域)。

5) 稲垣信志について改善したほうがよいところは？

- ・ありません
- ・改善しなくてもいいです
- ・いつもありがとうございます。明るくて笑顔で奥様も。ただありがたいです。これからもよろしくお願いします。
- ・男女言わず活動しておられて本当に良い事と思います
- ・農業していても利益が少ないので後々どうなるのか心配です。心配しなくて良い？
- ・事前にもっと相談した方が良い(自治会に)
- ・地域のやり方というものをよく聞くこと。その旨自分の行動に合わせて行けばと思います。
- ・自分の思いで人々を動かすのではなく、みんなの気持ちを先に聞く方が大切だと思います
- ・あなたより年齢の高い人が沢山いるので短時間で物事をまとめようとしてもだめだと思う
- ・地域のやり方というものをよく聞くこと。その旨自分の行動に合わせて行けばと思います。
- ・活動に参加したことがないからどのような人物なのか知らない